M. J. マーチンのこと

（株）データ工学
喜多尾憲助
E-mail: kitaoken@aol.com

今年発行されたNuclear Data Sheets誌の第1号，つまり第86巻第1号は，Editor, J. K. Tuli の Murray. J. Martin への献辞で始まっている。Martin は 1981 年以来，Editor-in-Chief として同誌の編集・出版に当たって来たが，このほど ORNL における staff scientist を retire するのにともなって，職を辞すことになった。献辞によれば，彼はカナダのサスカチュアンで生まれ，1956 年に Saskatchewan 大学を出ているから，現在 65 歳ぐらいというところであろうか。Ontario 大学で 1963 年ドクターを取得すると，Katherine Way が指導する全米アカデミーの核データプロジェクトに参加，β 崩壊や角相関データの解析の専門家として核データ評価者の仲間入りをした。1964 年同プロジェクトの Oak Ridge への移転にともない，彼も Fay 夫人と共に Oak Ridge に移り，以後同地に居を定めている。1981 年同プロジェクトは BNL に移ったが，ORNL に残った彼は B. Ewbank の後を受けて，核データ活動の責任者になった。

われわれ日本の核構造崩壊データ評価グループが発足したとき，彼は原研にやってきて 3 日間にわたり評価手順などを伝授してくれた。1979 年 12 月のことである。どんなことを話してくれたか，もう忘れてしまったが押し付けがましいようなこともなく，まことに紳士的であった。このトレーニングの成果である，われわれの最初の評価データが accept され，congratulation！書かれた手紙をもらったときはとても嬉しかった。その後の小生の提出する原稿は，真っ赤かになって Martin から戻ってくるばかりで，congratulation のお言葉を頂いていない。まことに情けないことである。もっとも日本からの ENSDF(評価済核構造データファイル)原稿第 1 号は，最終的に松本純一郎さんがチェックして送ってくれたお陰ではないかと思っている。(松本さんのやり方は Martin に似ているところがあり，いろいろ教わった。早く亡くなってしまったのはとても残念である。)

核データの評価に関係するものとして，彼から受ける印象は，執筆者（評価者）と妥協しない厳格な編集者と言うところであろうか。ENSDF は，ご承知の通り実験データを基礎とする。γ 線エネルギーなどは，論文からそのまま写すことになるわけだが，ENSDF 原稿に書かれたこれらの数値は，Martin が一つ一つ原論文と付き合わせて写しミス，記入漏れをチェックする。誰かアシスタントがいたかもしれないが，チックはまぎれもなく彼の筆跡である。ENSDF にはまたさまざまなコメントが書き込まれる。これがどうも

苦手で，定型的なものは問題はないが，表現に迷って時間を費やすことが多い。怠けるとMartinはすかさず指摘してくる。「なぜこの結論がでてくるのか，私には理解できない。」「この数値は次の値を採用すべきで，コメントは.....と書いたらよい。」「次の文献は是非採用すべきである」などと，分厚いコメントを送ってくる。いっそ自分でやったら良いのに，と失礼な思いに囚われることは珍しくない。あるときは，核反応の実験論文中の放出粒子のスペクトル図から読み取った粒子エネルギーをA3大のグラフ用紙にプロットしたものを送ってきて，この論文はこれこれしかじかで，エネルギー校正がずれている。採用準位のエネルギー値にはゲタをはかせ，その理由をコメントせよと言ってよこしたこともある。評価において，彼は実証主義に徹しスペキュレーションを退けた。質量数依存の傾向が見られたとしても，その理屈が無ければ平均値を採用することを主張した。ENSDFの校閲に手抜きすることはなかった。Tuliはuntiring enthusiasmという言葉を使っている。まさに「憑かれた人」「仕事の鬼」であったが，その仕事振りを通してして多くの評価者を育てたことは間違いない。しかも偏狭な指導者でなく，完全な紳士であり，友情あふれる人という評価は，はじめにも述べた通り，われわれとの短い付き合いでも十分に感じられたのである。

最近，査読から戻ってきた原稿に付けられた手紙によると，原論文に当たっていないから数字などはお前の方でチェックしろ，とあった。そそっかしい小生などにはガツンとくる言葉である。

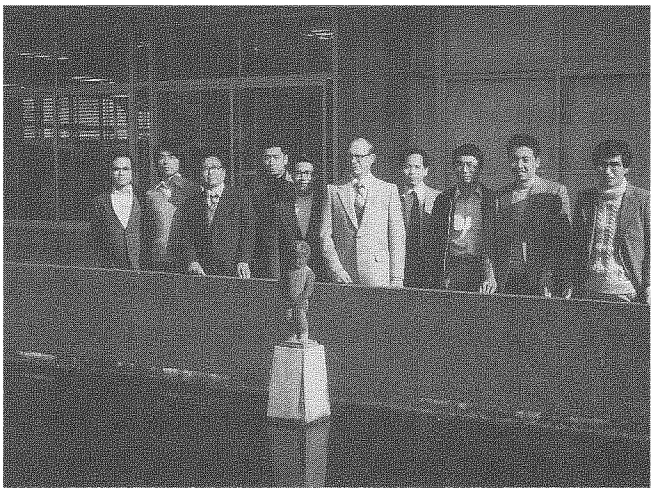

写真　マーチン先生とその生徒たち（右から、宮野和政、大矢　進、大島真澄、田村　務、マーチン、橋爪　朗、天童芳彦、松本純一郎、神戸政秋の各氏と筆者。1979年12月原研にて）